

クリヨウジ作品 アーカイブプロジェクト

鯖江市

概要／課題

本事業は、作家クリヨウジ(久里洋二※2016年にカタカナ表記に改名)氏のアニメーション、漫画、美術作品など未整理の資料を中心にジャンルや年代など系統立てて調査し、カタロギングとデジタル化を実施することで、氏の広範な創作活動について包括的に捉え、次世代に資することを目的とした事業である。

1950年代から、漫画、アニメーションの世界で活動を始めたクリ氏の作品は、日本のメディア芸術の先駆時代の検証に必要不可欠なものである。しかし、それらの貴重な作品及び関連資料は、アトリエや倉庫で適切な形で保管されておらず、劣化や損失が危惧される現状にある。また、クリ氏の長年の創作活動は多岐にわたり分量も多いため、全ての資料の調査・カタロギング・デジタル化には複数年かかると推定される。

本事業は複数年での完了を目標としており、作業計画の基、未整理資料の総合的な調査、デジタル化を行い、クリ氏へのヒアリングを通して資料の全容を把握するべく取り組みを進める。

今年度も引き続き、過去にデジタル化されていないフィルム作品を主とし、貴重性、保存性を考慮した上で、優先順位の高い作品のデジタル化を行った。

体制／手法

鯖江市(鯖江市まなべの館)と久里実験漫画工房が共同してプロジェクトを行った。

・資料整理・調査およびデータベース化: 久里実験漫画工房

クリ氏の指導の下、未整理のフィルムプリント、原画などの関連資料の調査を実施し、カタロギングを行う。今年度は量の把握と未整理資料の一部を整理してカタロギングを行った。

・ヒアリング記録・編集: 久里実験漫画工房・当該専門家

アニメーション、漫画などメディア芸術作品に対するヒアリング、インタビューを行う。今年度は主にアニメーションの領域において当該専門家によるインタビューを行った。

・デジタル化: 久里実験漫画工房・株式会社IMAGICA

保存すべきメディア作品のジェネレーションを確認し、外部委託によりコンディションの確認などの専門的な検査を実施し、デジタル化を行った。

指導・監修: クリヨウジ(久里洋二)

事務統括: 鯖江市

成果

(成果物)

・クリヨウジ(久里洋二) メディア芸術作品目録(2023年度版)

・クリヨウジ(久里洋二) メディア芸術デジタル化作品(2023年度版)

「ゼロの発見」・「FLAGs」・「女房学校」・「エレクトン・ポストーク」

「馬鹿々々々々の世界」・「PARODY STAR WARS」・「CMパロディー」・「AOS」

「フロイトの木」・「カキメーション」・「鈴廣アニメ」・「カラクリ街道」

「漫画家の旅行」・「ある社長の隠された話」

・クリヨウジ(久里洋二) 関連資料調査目録(2023年度版)

- ・クリヨウジ（久里洋二） ヒアリング・インタビュー記録(2023年度版)
インタビューは主に「漫画」をテーマに、「漫画とアート」「漫画とアニメーション」について行った。また今年度は急遽、今後インタビュー内容の重複を防いで内容の充実を図る必要性から、過去のインタビュー資料の調査を重点的に行った。

(公開方法)

- ・クリヨウジ メディア芸術デジタル化作品(2023年版)の公開
第16回鯖江市美術展 関連企画「クリヨウジ アニメーション実験をはじめめる2023」
(会期：令和6年3月2日～8日・場所：鯖江市まなべの館)



- ・第27回アートフィルム・フェスティバル
(会期：令和5年10月21日(土)から11月1日まで・会場：愛知芸術文化センター)
- ・福井県立鯖江高等学校 デザイン科 授業で活用(令和5年12月から)
- ・HPにて公開 クリヨウジアーカイブサイト(URL <http://yojikuriarchive.com>)

(文化的・社会的・経済的な意義)

- ・日本のメディア芸術における先駆時代の検証
- ・次世代に資する貴重な資料へのアクセス性の向上
- ・クリ氏の故郷で多くの作品を展示する美術館における展示の充実と優れた作品を鑑賞する機会の創出

クリ氏の創作活動の中でメディア芸術は最も重要視される分野であり、そのアーカイブは日本のメディア芸術における先駆時代の重要な検証につながるものである。それらの作品情報へのアクセス性を高めることで、次世代への貴重な資料として資することが可能となる。また、クリ氏の故郷で多くの作品を展示する美術館においては展示の充実を図ることができ、多くの人にクリ氏の優れた作品を鑑賞する機会の提供が可能となり、教育文化の発展に寄与することができる。

さらに、成果物の公開によりクリ氏の活動に再び注目を集めることで、事業成果の周知と、出身地などの地域活性化やメディア芸術産業への経済的寄与を図る。

(残された課題)

このプロジェクトは作家へのヒアリングにより作品をより深く検証できることにその意義が最も有効に生じる。作家の年齢(96歳)を鑑みつつ、できるだけ多くの情報を得て各資料を調査しデジタル化することが重要である。また、各資料の内容を把握しているのは作家のみという状況を踏まえて、迅速に作業を進めなければならない。